次世代の学会

The Next Phase of Our Society

風 間 健

ぼくが繊維学会の学生会員になった1951年から70年代にかけて、学会員の関心はテキスタイルにあった。お互いの専門が理解でき、講演会、研究発表会、会誌など、いずれも共通の場があった。80年代に入って新合繊が出現したが、用途の中心はまだ衣料にあった。

やがて繊維の新機能の開発が進むと、それに応じて繊維の用途も広がった。そうすると会員の関心や知識は拡散し、お互いの技術が理解しにくい状況になる。

過日、繊維技術フォーラム第1回講演会に出席した。ものづくり分野に向けて経済産業省が支援する、ロボット、航空機など7アイテムに、本年から「ファイバー」が加わったという。何と先端技術の8番目に、ノミネートされたわけである。「ファイバー」の中身は多岐にわたる。炭素繊維による自動車や航空機の軽量化、脱石油繊維の開発、建設・IT分野への繊維利用、医療における組織再生用部材など。いずれもキラキラした未来を予感させるが、いかにも広い分野である。

これでは学会誌をすみからすみまで理解することは、まづ不可能である。講演会や研究発表会で自分の専門分野だけしか関心を示さないのも当然である。学会誌は必要な箇所だけコピーすればよいものとなり、それはホームページや図書館などで容易に行われる。かくて学会誌をとる必要が無くなり、技術者の学会離れが起こった。

学会はsocietyである。これはassociation、league(共通の目的を有する会員組織)、partnership、participate(参加)、coalition(連携)などと同義とされる(Roget's Thesaurus of English Words and Phrases)。そうである以上、技術を知りたい会員同士の密な交流がなければならぬ。しかしそれら会員は、お互いに細分化された専門分野に属し、知識も関心も細分されているのだ。ではどうするか。

こんなことを考えていたら、初夢をみた。夢の第1幕は、従来型の研究委員会である。毎度おなじみのメンバーで構

成されているから、回を重ねるごとに親近感が増し、ときには飲みに行ったりもする。こうしてメンバーとして気心がわかり、お互いに理解が進むと、心おきない討議ができるので、種々の成果が生み出されてきた。ところがやがて関心が細分化され、研究会のメンバーが減り、ついには成り立たなくなる。行き詰まったところで、舞台は変わって第2幕に移る。ここでは研究委員会メンバーは、もはや集まらない。メンバーの交流は、すべてインターネットで行う。ネットの良いところは、ごく少人数でも、効率的な交流ができることにある。例えば研究成果をネットに掲載する。質問や疑問をネットに掲載する。それにメンバーが、どんどん書き込めばよい。

このケースにおける学会の役割は、ネット上に討議する場を設営することにある。ネット上に店を出す場を設営した楽天の役割である。研究テーマごとに登録したメンバーに対し、ネット上の関連記事を読み、かつ書き込む権利を与える。そのスペースは、共通の関心を持つメンバーのものになる。ネットの世界は隣人より近い。いつでもどこでも交流できるからだ。従来の研究会より密な交流ができるから、成果も期待できるに違いない。

この提案の泣き所は、「俺はネットが嫌いだ」と見識を誇る会員や、書き込む習慣を持たない会員にある。年配者に多い。とくに掲示板やブログへの書き込みは、若い人では日常化し、初めての相手でもまったく人見知りしない。ところが年配者には抵抗がある。なかなか書きこんでくれない。すべての会員を引き込むには、まず親しみやすいテーマから参加してもらうことである。これはネット上のゲーム主催者が講じる手である。

学会からは、「そんな面倒なことやれるか」とお叱りを受けるであろう。しかしこのような交流ができれば、もはや学会誌は刊行する必要がないし、成果の著作権も手に入る。研究委員会を運営する手間も省けるのだ。そのうち、講演会やシンポジウムもこの形式で催行可能になろう。壮大な将来展望のもとに、どこかの研究委員会から、まずは始めて見てはどうだろうか。

KEN KAZAMA

武庫川女子大学 名誉教授 工学博士

〒248-0003 鎌倉市浄明寺 6-16-25

Tel: 0467-25-5630 Fax: 0467-25-5630

E-mail: kazamakura@kvf.biglobe.ne.jp

〈専門〉クリーニング、消費科学

〈趣味〉ガーデニング